

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：34428

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520849

研究課題名(和文) 女のマスキュリニティ 第一次世界大戦期イギリスにおけるジェンダーとミリタリズム

研究課題名(英文) Female Masculinity: Gender and Militarism in Great Britain during the First World War

研究代表者

林田 敏子 (Hayashida, Toshiko)

摂南大学・外国語学部・准教授

研究者番号：10340853

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究が対象とするのは、第一次世界大戦中にイギリス陸軍の女性部隊に入隊した女性たちである。「女の居場所」である銃後の世界を離れ、軍隊の「なか」に足を踏み入れた女性たちは、銃後の女性との断絶意識を強くもつとともに、武器をとって戦う兵士との間にも自ら明確な一線を引いた。銃後の女性とも、戦場の兵士とも同一化されない「戦う女」のこうした心性は、男性の身体をこえた「女のマスキュリニティ」という概念でこそとらえることができる。それは、兵士(男性)のマスキュリニティと銃後の女性のフェミニニティを脅かしただけでなく、それまで当然視されてきたマスキュリニティとミリタリズムの一体性をも破壊したのである。

研究成果の概要(英文)：The aim of this project is to conceptualise 'female masculinity' which extends beyond male body and reconsider the established notion that masculinity is inseparable from maleness or manliness. During the First World War the British government introduced women into the armed forces on the large scale. The women, who enlisted in the Women's Auxiliary Army Corps and stepped into the battle fields, destabilised binary gender systems. These 'fighting women' threatened not only the masculinity of soldiers but also the femininity of women on the home front. The 'female masculinity' could challenge the dominant masculinity that naturalised the relation between maleness and militarism.

研究分野：西洋史

キーワード：西洋史 イギリス史 ジェンダー 第一次世界大戦 ミリタリズム マスキュリニティ 女性兵士

### 1. 研究開始当初の背景

ジェンダー研究の進展とともに、マスキュリティ研究は、近年飛躍的な発展を遂げている。「白人」の「中流階級」男性が研究対象としてアプライオリに設定されてきたことへの反省から、黒人や下層階級に焦点をあてた研究も進んでおり、いわば人種的・階級的「転回」ともいえるべき現象がおこっている。

しかし、こうした最新の研究も含め、マスキュリティ研究が分析の対象とするのは常に「男性」であり、マスキュリティという語は、「男性であること (maleness)」「男らしさ (manliness)」とほぼ同義にもちいられてきた。本研究は、男のマスキュリティこそが本物であるという考え方そのものを「支配的マスキュリティ観」として相対化し、男のマスキュリティの模倣ではない、女のマスキュリティを概念化することに学問的意義を見出そうとするものである。

### 2. 研究の目的

本研究は、第一次世界大戦中のイギリスで、陸海空軍の女性部隊に所属した女性、および本土防衛を目的とする軍事組織を立ち上げたヴォランティア女性を「戦う女」と定義したうえで、彼女たちが体現したマスキュリティを、女性のマスキュリティ、すなわち男性の身体をこえた、男性不在のマスキュリティとして概念化することを目的としている。

主な考察の対象は、1917年に発足した陸軍女性補助部隊 (Women's Auxiliary Army Corps: 以下、WAAC) と、これに先立つ形で創設された女性ヴォランティア予備軍 (Women's Volunteer Reserve) およびその後進組織である女性軍団 (Women's Legion) といったヴォランティア組織である。前線と銃後の境をこえた「戦う女」たちは、いかなる自己定義をおこない、社会はこれをどう見たのか。彼女たちが残した日記や書簡、これらの組織が巻き起こした論争やスキャンダルを分析することで、「女性」を主語にしたマスキュリティ研究の可能性をさぐった。

### 3. 研究の方法

(1) 第一次世界大戦期を生き残った女性たちの多様な経験を整理し、兵士のマスキュリティが「戦えない女」や「戦おうとしない男 (兵役忌避者)」との対比のなかで、いかに構築され、強調されたかを明らかにした。具体的には、大戦期の女性のイメージを、「犠牲者」「戦争を鼓舞する女神」「平和のシンボル」「戦う女」という4つのカテゴリーにわけ、表象と言説という二つの視点からこれを考察した。

まずは、女性たちの多様な大戦経験を、ヴォランティア活動 (救急・福祉・秩序維持) と労働代替 (男性労働を女性で代替するこ

と) という二つの観点から整理した。労働代替については、職業別にその特徴をおさえたうえで、それまで「男の職業」として認識されてきた分野への女性の進出が社会的にどう評価され、女性自身がそれにいかなる意味づけをおこなったのかを、新聞記事をたどりながら考察した。

次に、募兵ポスターの分析を通して、大戦時のプロパガンダ戦に女性がいかに「動員」されたかを明らかにするとともに、兵士のマスキュリティが構築・強化されていく過程について考察した。さらに、ベルギー侵攻時のドイツ兵の残虐行為に関する証言集および議会特別委員会の報告書を手がかりに、戦時の「あるべきマスキュリティ像」について分析した。

(2) 女性ヴォランティア予備軍や WAAC が発足するまでの経緯とその活動内容を概観したうえで、こうした女性組織と陸軍省とのあいだに生じた軋轢 (女性の地位や権限、制服、装備品をめぐる意見の相違) に注目しながら、軍隊という空間のなかで、いかにしてジェンダー・ラインの再定義がなされたかを考察した。また、女性ヴォランティア予備軍や WAAC の上層部を占めた上・中流階級女性と、組織の末端を担った労働者階級女性の違いに注目しながら、戦時における階級・ジェンダー・ミリタリズムの関係性について分析した。

(3) WAAC がおこした性モラルに関するスキャンダルをはじめ、新聞紙上で展開された論争を手がかりに、「戦う女」に向けられた批判について考えるとともに、隊員たちが戦場での体験を記した回顧録や、戦場で創作した詩の分析を通して、戦場体験によって「女のマスキュリティ」がいかに構築され、彼女たちがそれにいかなる意味づけをおこなったかを考察した。

WAAC に対するバッシングと性モラルに関するスキャンダルの全貌を労働省による調査報告書と新聞記事を手がかりに再構成するとともに、WAAC がこうしたバッシングにいかに対処し、隊員たちが自らの経験にいかなる意味を付与したかを、日記や書簡類をもちいて分析した。

### 4. 研究成果

(1) 本研究を通して、まず浮かび上がってきたのは、女性による労働代替が有した重要性 (ないしは緊急性) と、ジェンダー秩序の崩壊に対する社会の懸念とのコントラストである。女性は「戦場で血を流す」という意味では「戦えない性」であったが、さまざまな形で男性の代わりをつとめることで、総力戦、持久戦を戦った。一方で、そうした戦時労働の多くは、「産む性」としての女性の体 (= 母体) を危険にさらすものとして、また、

伝統的な性別役割分業のあり方に修正を迫るものとして危険視された。大戦期の女性に与えられた 'production' (生産) と 'reproduction' (再生産 = 生殖) という相反する二つの機能は、戦後のジェンダー秩序再編のさいにも大きな問題でありつづけた。

(2) 第一次世界大戦期のイギリスには、銃後の戦争協力にとどまらず、じっさいに戦場に足を踏み入れた女性たちも数多く存在した。女性ヴォランティア予備軍や WAAC に入隊した女性たちが残した日記やメモワールの分析を通して、銃後と前線の境界をこえた女性たちが、どのような入隊動機をもっていたのか、また、自らの軍隊経験にいかなる意味づけをおこなったかをさぐった。

そこで明らかになったのは、陸軍と種々の女性部隊は常に対立関係にあったわけではないこと、また、女性部隊の内部にも出自や待遇の差に起因する深刻な対立が生じていたことであった。両者の関係は単純な対立構図ではとらえることができないものであり、戦場におけるジェンダー関係は明らかな複層性を有していたといえる。

(3) 「戦う女」のケース・スタディとして、フローラ・サンデス (Flora Sandes) という一人の女性をとりあげた。サンデスはイギリス人女性でありながら、セルビア軍に兵籍を有し、バルカン戦線を最前線で戦った。イギリスにかぎらず、多くの国で女性が戦闘員としての資格を与えられていなかった大戦期において、女性であり、かつ兵士であることは、いかなる意味をもっていたのか。男と女、前線と銃後の境界を横断し、さまざまな空間と属性のあいだを行き来したサンデスの大戦経験を通して、女性兵士が引きおこしたジェンダーとナショナリティをめぐる問題について考察した。

(4) 銃後の世界を離れ、戦場に赴いた「戦う女」たちの心性とマスキュリティを、WAAC に入隊した女性に焦点をあてて考察した。軍隊という「男の聖域」に進出した WAAC の隊員たちは、発足当初から厳しい監視の目にさらされ、とりわけ、その性モラルに対する批判は、議会調査を要するスキャンダルにまで発展した。明確な根拠をもたない戦場での「噂」が発端となっておこったスキャンダルは、「戦う女」に対する兵士や社会の不信感をそのまま映し出すものであった。

「女性らしさ」を守るうえでもっとも重要な性モラルへの攻撃は、WAAC の女性たちを、一般の女性とは区別される「例外」とみなすことで、軍隊を「女の進出」から守るための一つの手段であった。そのことを十分に理解していた WAAC は、隊員やその職務内容の「女性らしさ」をアピールする宣伝活動に力を入れることで、これに対処しようとした。

(5) WAAC の隊員たちは、「女性らしさ」のアピールにつとめた部隊の女性幹部とは少し異なる自己意識をもっていた。戦場の現実に直面した女性たちは、「守られ」、「耐える」銃後の女性とは異なり、自ら「戦う」ことを余儀なくされた。また、厳しい軍隊的規律のもと、物資不足や死の恐怖と戦うなかで、隊員たちのあいだには、強い仲間意識と組織に対する帰属意識が芽生えていく。

武器をとって戦うことを許されなかった彼女たちは、「兵士 (= 男性)」と自分たちを明確に区別してとらえていたが、一方で、銃後の女性との断絶も強く意識していた。それは、隊員の多くが、日記や手紙のなかで、戦場での体験を銃後の女性には理解しえない特殊なものと位置づけていることから明らかである。銃後の女性とも、戦場の兵士とも同一化されない「戦う女」の心性を、(男性とは異なる)「女のマスキュリティ」という概念でとらえる有効性を確認することができた。

以上の研究成果を、複数の研究会で発表した後、著書(単著および共著)の形にまとめ、これを刊行した。

#### まとめ

本研究は大きくわけて二つの学術的意義を有している。一つは、マスキュリティ研究に歴史学の立場から新たな視角を付与したこと、もう一つは、「大戦はジェンダー秩序そのものに何ら変更を迫らなかった」という「戦争とジェンダー」をめぐる近年の研究動向に一石を投じたことである。

戦時中ほどマスキュリティの定義が明確化される時期はない。戦場で血を流す兵士のマスキュリティは、「戦おうとしない男」や「戦えない女」との対比のなかで構築され、強化される。戦時のマスキュリティは、戦死(の可能性)や軍隊内の厚い友情といった「女が体験しえないもの」を核として形成されたが、戦争の現実をまのあたりにした女性たちの言説からは、兵士と同様の心性を読み取ることができる。

ただし、「戦う女」たちは、兵士として戦うこと (= 男になること) を欲していたわけではけっしてない。その多くが兵士との差異を認め、これに一定の距離をおいたからである。また、一方で彼女たちは、銃後の女性(戦えない女性)とのあいだにも線引きをしようとした。つまり、彼女たちが追求しようとしたのは、「男のマスキュリティ」でも「女のフェミニニティ」でもない、「女のマスキュリティ」といえるものに他ならなかったといえる。

女性の身体によって表現される(目に見える形での)マスキュリティは、兵士 (= 男性) のマスキュリティを侵犯しただけでなく、マスキュリティとミリタリズムを同一

視しようとする考え方そのものを破壊する。男と女、マスキュリティとフェミニティという二項対立ではとらえきれない「戦う女」への着目は、マスキュリティと「男性らしさ (manliness)」を切り離すことはできないとする従来の研究の前提を打破し、新たなジェンダー研究の地平をひらくうえでも、きわめて重要な視座を提供したといえるだろう。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計 1 件)

林田敏子「小シンポジウム「第一次世界大戦」コメント「ジェンダーの視点から」日本西洋史学会第 63 回大会、2013 年 5 月 12 日、京都大学(京都府・京都市)。

[図書](計 2 件)

林田敏子「女性であること、兵士であること バルカンの女性兵士フローラ・サンデスの大戦経験」山室信一他編『現代の起点 第一次世界大戦(第 2 巻)総力戦』岩波書店、2014、217-240。共著。

林田敏子『戦う女、戦えない女 第一次世界大戦期のジェンダーとセクシュアリティ』人文書院、2013、162。単著。

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

林田 敏子 (Toshiko Hayashida)  
摂南大学・外国語学部・准教授  
研究者番号：10340853